

岩津ねぎだより

令和元年 8月
岩津ねぎ産地協議会
生産支援チーム

今年の、セル苗及びチェーンポット苗の定植は、6月中旬頃から始まりましたが、梅雨入り後は曇天、降雨の日が多く、定植が遅れたほ場も見られました。また、排水対策が十分でないほ場では、湿害による葉先枯れも見られます。

病害虫の発生は、例年に比べてべと病の発生が多く、一部のほ場では白色疫病の発生も散見されます。早急に防除を実施し、被害の拡大を防ぎましょう。

①今年、べと病と白色疫病の発生が多く見られます、早めの防除を実施しましょう

【べと病の発生状況と病斑】

今年は、育苗時期から、べと病が発生しています。梅雨入り後の高温、曇天、降雨の影響から、例年に比べ多くのほ場で見られ、生育が阻害されています。

べと病は、土壤中で越冬した病原菌が、葉に寄生しカビの発生が繰り返され、被害が拡大します。連作ほ場で多く発生する傾向があり、病気の発生適温は20℃前後で降雨(多湿)が多いと蔓延します。現在、多発しているほ場では、気温が下がる秋以降さらに発生が懸念されます。



葉にぼやけた不整形の退緑色斑点を形成し、多湿時には表面に灰色のかびを認める。斑点と健全部の境界線は不明瞭で、発病が進展すると葉は灰白色になって枯れ上がる。

発生が見られるほ場は、リドミルゴールドMZ 1000 倍液やアミスター20 フロアブル 2000 倍液等で、10日おきに2回程度の防除を実施しましょう。

発生が少ないほ場は、テーク水和剤 600 倍液やジマンダイセン 600 倍液等で防除し、発生の拡大を防ぎましょう。

【白色疫病の発生状況と病斑】

排水の悪いほ場を中心に、白色疫病の発生が見られます。梅雨期頃から初秋に発生しやすく、降雨が多いと多発し、台風や豪雨で集中的に雨が降ると激発します。また、窒素肥料を多用した、ほ場では発病しやすいです。

病斑は、葉の中位や葉先に黄白色の不整形な病斑を生じ、病斑部は白く枯れて、罹病部分から葉が折れ曲がり、急速に拡大します。病変部と青白色の健全部分は、明瞭に区別されます。



対策として、発生が見られるほ場は、下記農薬を散布し、ほ場の排水対策を徹底して下さい。

薬剤（農薬）	薬剤名	適用病害	使用倍率	使用時期等	使用回数
アリエッティ水和剤		疫病・べと病	800倍	収穫3日前まで	3回以内
リドミルゴールドMZ		べと病	1000倍	収穫30日前まで	3回以内

（但し、リドミルゴールドMZは、べと病のみの登録、たまねぎで白色疫病に登録あり）

※農薬散布には展着剤（アプローチBI、ワイドコート）は必ず使用しましょう。

注意）農薬は、使用基準を守って使用しましょう。

【害虫の発生状況と対策】

アザミウマやハモグリバエの発生が見られます。今後、高温状態が続くと被害の拡大が懸念されます。ダントツ粒剤を10a当り3～6kg散布しましょう。

②今すぐに、排水対策を徹底しよう

ほ場周辺の、額縁溝が排水口につながっていないほ場では、降雨後、ほ場内に水が溜まっています。（右写真上）

排水対策が十分でないと、高温多湿状態が続き、軟腐病やネダニの発生につながります。

今後は、局地的な雷雨が懸念されます。排水対策を怠ると、今後の生育に影響しますので、右写真下のように、ほ場の周りの額縁溝や条間に浅い溝を設置して、ほ場排水に努めましょう。



③中耕と土入れ作業を実施し、品質向上を目指そう

梅雨の間、降雨の影響から、土が締まり、根に酸素が行きにくい状態となっています。また、雑草の発生も見られます。

ねぎの生育やほ場の状態を見ながら、管理機で条間の中耕作業、株元への軽い土寄せ作業を実施し、根に酸素が行くように努めましょう。



管理機による土入れ作業

④追肥はあわてずに、2回目の土寄せ時から実施

気温が高い時は、チッソ肥料（IBS890、S604など）を大量に施用すると、根焼けを起こすだけでなく、病害発生を誘発してしまいます。追肥は9月に入ってから行いましょう。

<施肥設計>

[10aあたり]

	資材名	施用量	施用時期
追肥	やさいめいじん	90kg	2回目土寄せ時
	燐硝安加里 s604	30kg	3回目土寄せ時

<問合せ窓口>

和田山営農生活センター：672-4800
 山東営農生活センター：670-7744
 朝来営農生活センター：670-4341
 朝来農業改良普及センター：672-6886